

Title	<図書紹介>ウィリアム・S. ピータースン著湊典子訳 『ケルムスコット・プレス ウィリアム・モリスの印刷工房』平凡社1994 521P
Author(s)	白石, 和行
Citation	デザイン理論. 33 P.108-P.109
Issue Date	1994-11-12
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/53075">http://hdl.handle.net/11094/53075</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

ウィリアム・S. ピータースン著 湊典子訳  
『ケルムスコット・プレス — ウィリアム・モリスの印刷工房』

平凡社 1994 521P

白石和行／京都工芸繊維大学大学院研究生

本書『ケルムスコット・プレス — ウィリアム・モリスの印刷工房』は William S. Peterson による *The Kelmscotte Press: A History of William Morris's Typographical Adventure* の全訳である。著者はアメリカのメリーランド大学の英文学部の教授だが、書誌に関する造詣も深い。また世界的に見て現在のケルムスコット・プレス研究の第一人者であるといわれるほどで、これまでにその関連資料をまとめた *The Ideal Book* (邦訳『理想の書物』1992年、晶文社刊) 及び *A Bibliography of the Kelmscott Press* を著述している。本書はこれらの資料をもとにケルムスコット・プレスの歴史を集大成したものである。これまでにケルムスコット・プレスの歴史についてこれほど本格的に扱った著作はほとんどない。1924年に Halliday Sparling 著 *The Kelmscott Press and William Morris Master-Craftsman* が出版されたが、それ以来の本格的なケルムスコット・プレス論となっている。

本文を概観しながら、その内容を若干紹介しておこう。第1章はヴィクトリア朝の印刷事情について書かれており、ヴィクトリア朝の印刷業者によるタイポグラフィや書物デザインの例が紹介されている。ヴィクトリア朝の書物に見られたモダン・フェイスのタイポグラフィが書物の美しさを損なっているというのがモリスの主張であった。第2章はモリスと書物の芸術について、ケルムスコット・プレス設立以前に制作したモリスの手稿本、あるいは印刷本のデザインについての考えが紹介されている。モリスは手稿本を、生涯に

わたって断続的に試みているが、あくまで友人たちへの贈物として制作されたものであった。しかし、それらは書物の理想的な形態が手稿本にあると、モリスが感じていたことを暗示している。第3章はケルムスコット・プレスの設立のいきさつと、モリスがケルムスコット・プレスを設立する直接的な契機を与えた人物であり、技術面での助言者であったエマリー・ウォーカーについて述べられている。ケルムスコット・プレスの出版活動はウォーカーの技術的な知識があつて初めて可能であった。章の後半では、ケルムスコット・プレスで用いられたゴールデン・タイプ、トロイ・タイプ、チョーサー・タイプの活字デザインから、それらの製作過程について記述されている。第4章には書物デザイナーとしてのモリスによる紙、ヴェラム、インクなどの素材へのこだわりの様子が紹介されており、またモリスのタイポグラフィ理論が、ケルムスコット・プレス以前の書物デザインの実験、エマリー・ウォーカーの助言、ケルムスコット・プレスでの書物デザインの試みなどによって徐々に形成されていった過程が詳細に解説されている。第5章ではイニシャル、ボーダー、オーナメント、それに挿絵とタイポグラフィとの関連について述べられている。ケルムスコット・プレスの出版物は20世紀前半の機能主義の理論によってその装飾の過剰さが非難の対象となった。本章の内容で興味深いのは、モリスが書物の挿絵を教科書などの明白な機能をもつ場合を除いて、書物の挿絵を装飾の一部であると考えていたことである。モリスが書物デザインに求めたのは言語と装

師との芸術的な統合であった。したがってモリスの書物デザインの装飾性は必然的なものであった。第6章はケルムスコット・プレスの運営に関してで、ホリデイ・スパーリング、シドニー・コッカレル、フレデリック・S. エリス、バーナード・クオリッチなど、ケルムスコット・プレスの運営に大きく貢献した人物に関してである。ケルムスコット・プレスの活字や書物の模造品がでるくらい、当時のケルムスコット・プレスの出版物が、人気を博していたことが分かる。第7章は『折ふしの詩』、『プロテウスの恋愛抒情詩』、『黄金伝説』の3点の書物の制作過程の様子が紹介されている。なかでも『プロテウスの恋愛抒情詩』の制作過程にみられるモリスとウィルフリッド・スコーエン・ブラントとモリスの妻ジェインとの三角関係による感情的な動揺が興味をひく。第8章はケルムスコット・プレス版『チャーサー作品集』についてであり、ケルムスコット・プレスの出版物の代表作であり、世界的な美書の一つに挙げられる『チャーサー作品集』の制作過程の様子が紹介され、この作品がモリスとバーン＝ジョーンズがともに大学生時代から出版することを夢見てきた理想の書物の極致を示す作品であったことが分かる。第9章はケルムスコット・プレスの閉鎖に関してである。モリスの死後、ケルムスコット・プレスを実質的に引き継いだコッカレルが、ケルムスコット・プレスを責任をもって廃止するに至るまでの記述がなされている。第10章はケルムスコット・プレスの出版物が後世に与えた影響について書かれている。

以上が本書の主な内容であるが、著者はウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスの試みがゴシック・リヴァイヴアルの最終段階を示すものと位置づけている。そこにはよく言われるようにモリスがモダン・デザイン

の先駆者としてではなく、どちらかといえば時代に逆行する復古主義者であったことが示されている。だが重要なのはモリス流の社会に対する批判的精神が含まれていたことである。モリスがケルムスコット・プレスの出版物を通じて、ヴィクトリア朝の商業的出版物のデザインを見直させるために、美しい書物のデザインの見本として、中世の手稿本やインキュナビュラ（初期刊行本）を書物デザインの理想としたことが注目に値する。

最後に本書の意義について簡単に述べておこう。モリスの文字デザインやタイポグラフィ、あるいはケルムスコット・プレスと当時の印刷業界との関係をこれほど克明に著した書物はきわめて少ない。また本書の歴史的記述から分かるように、美しい書物デザインのためのモリスの理想が、有能な助言者たちによって初めて具体化したということである。本書の書物芸術とは何か、という問いかけが、モリスの書物デザインの追求を見事に反映しており、それがまたケルムスコット・プレスの存在価値を証明し、現代的デザインの方法論にもフィードバックされる可能性を暗示しているように思える。現在から100年も前のヴィクトリア朝の印刷技術では、実際的に不可能であったために、モリスの理想的な書物デザインの実現が困難だと非難され、商業印刷ではそれが取り入れられないことも多かったが、今日のようにコンピュータが印刷機と連動されて自在に用いられるようになった時代では、モリスの素材へのこだわりを別にして、タイポグラフィやレイアウト、書物デザインに限定すれば、モリスの書物デザインの理想が実現できそうにも感じられる。こうしたモリスの書物デザインの具体的な試みを知ることは、現代的デザインの方法論を問い直す良いきっかけとなるように思える。